

④ 対話による「つながり」とプロジェクト・インキュベーション

1 「コミュニティ」から「プロジェクト」へー新しい関係のあり方ー

人はみなつながりの中に生きています。つながりは別の言い方をすれば、「コミュニティ」という概念で整理することもできる。コミュニティの定義は、一つには、個人がある関係性の中に身を置き、安心・安全な生活を手に入れ、さらには、自己実現を可能にする環境そのものだと考えることができる。この「コミュニティ」を創り出す個人の視点に立ったときに、自らの課題解決と自己実現を可能にするつながりは、どのようにすれば創り出すことができるだろうか。

野沢慎司（注1）は「現代のコミュニティは、個人が継続的に埋め込まれる所属の場ではなく、より短期的に変動しながら動いている『プロジェクト』として捉えることができる。」と論じているが、本稿では、「コミュニティ」という概念を個人の意思による関係の束として捉え直してみたい。すべての関係性を「プロジェ

クト」として捉え直し、永續性や統一性、境界線を前提とせず、必要に応じて随時再編成されるものと考えてみることで、横浜のような大都市の状況をより实际的に把握できるのではないか。

現代では、様々な問題が途切れることなく発生し続け、目まぐるしいスピードで変じていく。単一の専門的な知識だけでは解決できない事案が多数発生しているのも承知のとおりである。だからこそ、生じた問題に即時に対応しえる「プロジェクト・インキュベーション」、すなわちプロジェクトを孵化させる仕組みと環境を整えていく必要がある。これを定期的に発動させることで、新しいつながりを創造し、そのつながりから多様なプロジェクトを創り出すことが重要である。

執筆

沼田 真一

早稲田大学
参加のデザイン研究所 招聘研究員
ビッグバン・ヌマ株式会社
代表取締役

クトを創り出すことが可能だろうか。

そこには「参加」「体験」「対話」を三位一体としたワークショッププログラム、もうすこし卑近な言葉で言い換えれば、広い意味での「イベント」が必要であろうと考える。つまり、多様な人々が出会い、意見を交換し、自分の中に気づきと発見をもたらす、新しい活動を始めるきっかけとなる「場」を作り出すのである。仮に、このような機能もつワークショッププログラムを「対話型イベント」として名付ければ、まず注目すべきは「ワールドカフェ」という手法である。

ワールドカフェという対話手法は、この数年で、日本の各地で実施されるようになってきた対話型イベントである。普及の大きな契機になったのは、2009年に横浜市で実施された市民参加型都市ブランド共創事業イマジン・ヨコハマである（注2）。横浜の未来を語り合う手法としてワールドカフェを採用し、パシフィコ横浜を会場として、500人

規模の対話型イベントが行われた。2009年以降、ワールドカフェの実施回数は膨らみ続け、現在では、この参加者が複数のプロジェクトを立ち上げ、コアとなって、横浜市内各地でワールドカフェが実施されるようになっており（注3）、日本全国でも実施の回数が増えている。

3 ワールドカフェの機能と特徴

ワールドカフェという対話手法は、表1のような整理が可能であろう。

（注1）野沢慎司「プロジェクト化・ネットワーク化する家族とコミュニティ」高橋勇悦・内藤辰美編「地域社会の新しい（共同）リーダー」（恒星社厚生閣、2009年、131-149頁）
（注2）本誌42ページ参照
（注3）本誌44ページ参照

2 つながりのデザイン手法 1 つながりを生み出すための方法

では、どのような仕組みがあればつながりやプロジェクト

ワールドカフェという対話手法は、この数年で、日本の各地で実施されるようになってきた対話型イベントである。普及の大きな契機になったのは、2009年に横浜市で実施された市民参加型都市ブランド共創事業イマジン・ヨコハマである（注2）。横浜の未来を語り合う手法としてワールドカフェを採用し、パシフィコ横浜を会場として、500人

規模の対話型イベントが行われた。2009年以降、ワールドカフェの実施回数は膨らみ続け、現在では、この参加者が複数のプロジェクトを立ち上げ、コアとなって、横浜市内各地でワールドカフェが実施されるようになっており（注3）、日本全国でも実施の回数が増えている。

ワールドカフェの主旨は、参加者個人の気づき・発見を軸とするケースが多い。その形式は発散型であり、場の意見を集約して、合意形成や意思決定を行うことを意図しない。対話を三つのテーマで順番に行うケースが多く、テーマごとに六人程度でテーブルを作り、一つのテーマの対話の時間が終わると一人が残り、メンバーを入れ替える。

あるが、これはテーブルにファシリテーターのような進行補助を必要としないことが大きく影響している。

実施場所も、会議室のような雰囲気や、カフェ的な空間づくりを目指す。対話の時間に音楽をかけたり、飲食を可能としたりとよりよい対話を創りだすための演出に力を入れる。また、個々の気づきと発見を軸にしているため、ここで会話された内容の記録をそれほど重視しないこともある。ただし、参加者同士の対話の創発的展開を狙って、テーブルで共有している模造紙を大きなメモ帳として自由に記載するように設定されている。

4 ホール・システム・アプローチ—新しい対話の形

ワールドカフェは、一言で言えば「相互理解促進」イベントである。

地域社会において、合意形成の前段階として優先されるべきは、その個人の持つ文化、志向、性向の「差異」を知ることである。社会的地位での上下関係や利害関係から離れ、個人としての興味関心や共通項が見つければ、互いに親近

感が高まり、より具体的でセンシティブな話もスムーズに進めることができる。少なくとも、互いに「異なる文化や背景を持つ『ここ』にいる」ことを感じ、認め合うことが優先される。それはワールドカフェのエチケットとして「傾聴」を重視することにもよく表れている。

ワールドカフェは社会構成主義(注4)の思想を強くもつため、二元論的枠組みから離れて「世界」を再構築することを目指している。たとえば、「私」と「他者」という関係性からでなく、「私たち」という共同体としての関係で「対話」を行い、そこで語られる「物語」から新しい未来を創りだそうとしている。

ワールドカフェという手法は非常に注目を集めているが、こうした対話型のプログラムは「ホール・システム・アプローチ」(注5)と呼ばれ、他にも「オープン・スペース・テクノロジー」(OST)という手法の実施機会も増えている。OSTは一言でいえば、「テーマ提案型分科会」である。

ワールドカフェは主催者により対話のテーマが決められているのに対して、「オープン・スペース・テクノロジー」は参加者の一人一人が対話の

テーマやプロジェクトのアイデアを提案する権利を持つ。そして、この提案に対して、他の参加者が参加するテーマ・アイデアを決定し、分科会を開始する。参加者全員で学校の時間割を作り上げ、参加する授業も自分で決定する状況をイメージするとわかりやすい。自ら話題としたいテーマを掲げ、そのテーマに興味関心を持つ人々同士での対話が可能となるため、対話の熱量が非常に高くなる。また、この対話のゴールを「プロジェクト」の立ち上げとすることで、継続的な情報交換やミーティングの自発的展開を誘発することができる。

OSTはまさに「主体性の発動装置」であり、プロジェクト・インキュベーションを可能にする仕組みである。

5 プロジェクト・インキュベーション事例—泉区の事業から—

こうした「ホール・システム・アプローチ」の仕組みを定期的に発動させる環境が各区、各地域に整えば、つながりづくりや「プロジェクト・インキュベーション」が可能となる。

横浜市では、私自身がファ

シリテーターとして関与し、旭区、泉区ですでにこうした試みが行われている。紙面の都合上、これらの事例のうち泉区の事業についてのみ、その具体的な展開を示したい。

2011年に泉区で実施された「いず魅力発見しゃべり場・100人で語る泉区の未来」事業は、参加者同士の「つながりづくり」「アイデアの意見交換」の2つを軸にしながら、「プロジェクト・インキュベーション」を目指した事業である。

新しい市民活動の担い手の入門講座的位置づけであり、いままでも市民活動などに関わりがなかった区民を中心的な対象とした。こうした参加者が、互いにつながりを作り出し、また、自らの自己実現とともに、地域の主体的な活動のリーダーとして活動をスタートするはじめの一步としてプログラムを構成している。

表1 ワールドカフェの特徴 (KJ法的ワークショップと比較して)

	ワールドカフェのワークショップ	KJ法的ワークショップ
主目的	個人の気づき・発見	意見抽出、合意形成
形式	発散型	集約型
内容	テーマに関する自由な対話	付箋紙への記述と共通内容の整理
テーマ	1つ~3つ	1つ
メンバー	テーマごとに入れ替え	固定
人数	15~500人規模	15~50程度
場所	カフェ的空間	会議室
テーブル進行役	不要	必要
記録	不要(最低限)	必要
演出的要素	高い	低い
音楽	あり	なし
飲食	あり	なし

※沼田の経験に基づき、必ずしもこの限りではない。

(注4) 社会構成主義 (social constructionism or social constructivism) は「現実とは社会的に構成される」という言葉に代表されるように、「現実 (reality)」は人びとの社会的交流から生まれ、「言語」によって創り出されるとする考え方。

(注5) ホール・システム・アプローチは、組織の上下や横の垣根を取り払い、全員で話し合いを行うことで、組織の文化を変え、未来に向けた変革を行う、ダイナミックでエネルギーに満ちた取り組み。

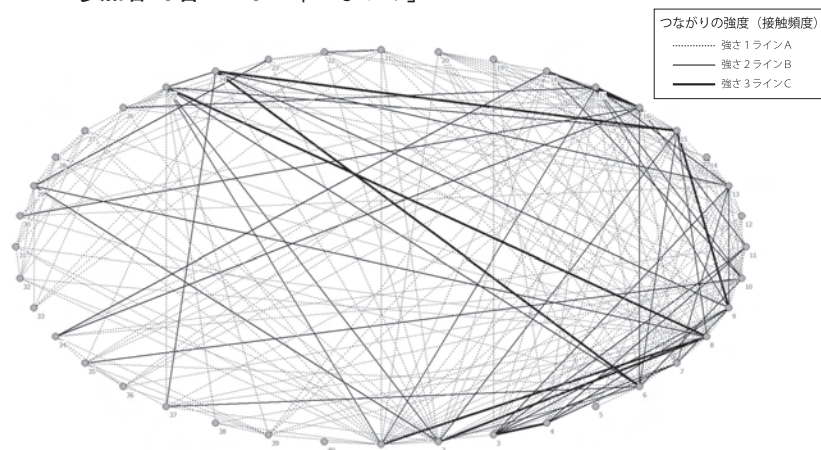
引用・ハリソン・オーエン『オープン・スペース・テクノロジー』5人から100人が輪になって考えるファシリテーション』ヒューマンパブリック、2007年

第一回目はワールドカフェを活用して、泉区の過去、現在、未来について意見交換し、泉区の魅力を語り合う「出会いの場」を設定した。続く二回目は「オープン・スペース・テクノロジー」をアレンジした「バズル・ミーティング」という手法で、参加者自身による意見交換のテーマ提案とそれに基づく分科会を行った。最終回にあたる三回目はプロジェクトの立案を目指して、二回目と同様の「バズル・ミーティング」を実施し、5プロジェクトを萌芽させ、「夜店方式」(注6)での情報交換や質疑応答を行った(表2)。

また、この連続3回のプロジェクトに参加する人々のつながりを可視化することで、どのような「つながり」が生まれたかの分析を試みた。具体的には全3回のプログラムにおいて、参加者同士でだれとだれが同一のテーブル上で出会い対話したのかを記録し、これをネットワーク分析ソフトによって図化した(図1)。小学生や主婦、民間事業者などを含む幅広い世代と所属を持つ40人の参加者全体で476の出会いを作り出したが、これを接触頻度別に3つのラインの太さで図示している。最も細い線のラインAは接触

頻度がもっとも少ないつながりで、十分な関係性を築けたとは言いがたい。最も太い線のラインCは、血縁関係や従来から知り合いであったために同一テーブルで対話した回数が多いことがわかった。注目すべきはその中間にあたる太さのラインBで、興味関心の類似した参加者同士で複数回の対話が行われ、プロジェクトのアイデアを深めるために有益な情報交換がなされたと考えられる。こうして表3

図1 「いず魅力発見しゃべり場」ネットワーク図
参加者40名 476の「つながり」



の5つのプロジェクトが生成された。

6 最後に「つながり」のパラドックス

「コミュニティ」を「プロジェクト」と捉え直す視点や、この「プロジェクト」を生み出すための手法として「ホール・システム・アプローチ」を紹介し、その展開事例までを論述した。しかしながら、そもそも「ワールドカフェ」への

注目の高さとその急速な展開は現代社会の中で何を映し出しているのだろうか。それは、孤立化する現代人の姿と、個人が求める「幸せ」に無関係ではないのだろうか。「つながり」の本質とは、そこに入れることができるものが何かの「幸せ」である。我々はICTなどのつながりを作り

出す。その人が認識している「つながり」の形は多様である。また、その「つながり」が何を生み出し、影響を与えたのかを測定するには長い時間がかかる。「効率」は、孤立を生む「効率」を考えられないだろうか。関係構築は効率化できない。時間がかかる。しかしだからこそ、今から積極的に取り組むべき未来への投資でもあると考える。

出すツールに恵まれた「つながりの世紀」に生きていながら、一方で対面型のコミュニケーションが不足し、つながりが希薄化するという「つながりのパラドックス」の中に生きている。

このパラドックスを乗り越えようとする試みとして、ワールドカフェはある。対話を求める個人の意思は、未来を描く想像力とその言語化を繰り返す、その探求そのもののプロセスが新しいコミュニティとしてのプロジェクトを生み出していく。

表3：「いず魅力発見しゃべり場」で生成されたプロジェクト

プロジェクトの名前	プロジェクトの内容
シルバー世代と季節を楽しむ生き方を	シルバー世代の独居を回避し、一人で解決できないことを吐き出しながら笑って過ごせる場を作る。
横浜まちの縁側ネット	「できることから始めよう」を合言葉に、地域のつながり・居場所づくりを目指す人々によるインターネットを中心としたネットワークづくり。
貸ミュージックバンド	ギター・ピアノなどの楽器を譲ってもらい、区民文化センターや地区センターなどで気軽に音楽を楽しむことのできる常設の場所を作る。
ニホンミツバチプロジェクト	ニホンミツバチにより自然や地域を知り、人や自然とつながるきっかけづくりを行う。
キッズコミュニティカフェ	子どもたちと一緒に集まれるママさんたちを中心としたカフェをつくり、その後、地場野菜の活用やニホンミツバチでまちおこし等のコラボを展開する。

表2 「いず魅力発見しゃべり場」プログラム概要(全3回)

○時間はいずれも13:30~16:30、場所は泉区役所吹き抜けホール

第1回	平成23年11月26日(土)「ワールドカフェ」で、泉区の過去、現在、未来を考える。
第2回	平成23年12月3日(土)「バズル・ミーティング」で参加者自身で意見交換したいテーマを提示し、分科会を開く。
第3回	平成23年12月10日(土)「バズル・ミーティング」で、プロジェクト化を目指し、また、夜店方式で、互いのプロジェクトの情報交換を行う。

(注6)「夜店方式」は意見交換手法の一つ。祭りの夜店のイメージで、説明する人(店番)を残して、他のグループメンバーは自由に他のグループを周り意見交換する。複数のグループの質疑を同時に行う手法。